

く、専らポット出の田舎者といはれてゐる。

さて、都會人の生活意識がリアリスティックに傾いてゐるだけ、事の志に副はない場合に、リアリズムから逃避の面も亦出て来る。詩聖ゲーテでさへも、まゝならぬ浮世に見きりをつけて詩の世界へ入つたと述懐したとかいふ。孔子や孟子やプラトーンなどの故事を引くまでもなくリアリズムへの反逆はえてかうした詩やミュージーホスの世界への逃避となるのである。都會における神経衰弱患者、憂鬱病者、失意者、失望者等は、形而上的耽溺傾向に進まないであらうか。世紀末的文學、危機の哲學、悲哀の思想、官能藝術等々がその産物でないといへるであらうか。とりわけ類似宗教の氾濫現象の如きは、この角度から理解しうべきものでないであらうか。

四

先年、倫敦デーリー・テレグラフから特派員として我が國を訪ねた或る記者は、東京に大學と名のつく學校の多いことに驚き、その何故であるかを訝つたが、同じく日本の不思議の一つとしてインテリ中産階級で郊外生活者の多い事實をあげその理由が分らず、不經濟であり、時

間の浪費でないかといふ質問を發したが、後の方の質問はワシントン大學のスタイナー教授も來朝の時繰り返してゐた。成程、西洋都市の標準型からすれば、都會の郊外居住者は富裕、有閑階級であらねばならぬ理窟であつて、⁽¹⁾疑問はまことに理窟であると思はれた。ではあるが、我が國都會のこの問題は、理窟では行きかないのである。若い時代田舎に育つた都會居住者第一世が優に七割以上も占めようといふ現状であるから、都會といつてもかういふところに田舎の臭がまだ抜け切つてをらぬ。それであるから三代たゝぬと江戸ッ子になれないといふ諺さへも出てくるのである。三代たつて社會的に垢抜けしてから自由民に取立てられるといふのは、古代社會一般に見る奴隷解放の掟であつたといふから、⁽²⁾都會流入者の農村性の携行はむしろ自然のことでもあらう。たゞ都會へ流入する程の人達であるから、リアリスティックたる點が多く農村性は携行しても決して殉教的ではないのであつて、都會の雰圍氣また至つて合理的であるから、新來者特有の性格が野性のまゝに發現せず措かないのである。都會特有の性格はこゝから益々促進せられる。消極的には競争、淘汰作用であるが、これらの消極作用を媒介として、アダム・スミスが祝福した見えざる手の導きはたつき、多角的文化が躍進するのである。

(1) Park and Burgess, the City, p. 51, Chart.
(2) Hearn, Aryan households.

都會の制度、慣習、思想の動性はこゝに豊かな土壤を見出すことになるが、それは有り餘る豊かさであり、實る文化の果實を噛みしめ、吸収消化してばかりゐる都會ではないのである。「社會拘束」といふ原理をあげ、一旦成熟した文化の恩恵の下に傳統生活に泥むことを、社會生活の常道と見るのは都會の性格に全然通ぜぬ見方であらう。社會の拘束性は他のいづれの場所におけるより現代大都市には通用しない。却つてそれと對峙する創造性が大都市特有の性格だからである。たゞ、かうした大都市に生産せられる流行、思想、新案等は田舎へ田舎へと放出され、一國文化をリードするのであるから、社會拘束はひろく一國單位の觀點に立つて初めて所期の説明を果す。そしてこの角度から眺める時、「すべての文明が都會文明である」ことも悟られるのである。かくして文明が文明として不斷の若さを誇らうとするなら、都會の性格であるこの創造性の、動脈硬化に陥ることを防止すべく、また都會流入人口の貯水池である農村人口といふホルモンを絶やしてならぬことを忘るべきでない。また同時に、農村ホルモン地帯が粗惡の都會文化の毒素に染まる危険に對しても、社會優生學の見地に立つて都會文化の淨

化に遡つて豫防陣を施さねばなるまい。

都會は現代文化をクロース・アップするばかりでなく、現代文化の製作者でもあるのであるから、謂ふところの現代文化の機械性も非人間性もそこには完膚なきまで露出されよう。人間即機械といふ譬は、都會の人間に對するほど適格性を證する場合はない。機械と機械の關係がエネルギー單位を以て計算せられると變りなく、都會人相互の間柄も、大方利益單位で割り切れるのである。都會の基礎が商取引に淵源する歴史は、人が人に對して商人である關係を永きに互つて一般化するものである。これこそ、都會の利益社會である眞の姿であつて、都會の都會たる相貌がかゝる點に捉へられるのはさきにも語つた。とはいへ、都會の持つところのこの相貌は、都會に對して後背地バックグラウンドとなる地方、農村の方面からする都會豫備軍の進攻を最大契機たらしめてゐるのであるから、何らかの理由によつてこの契機が停止でもするやうなことがあるば、如何に都會といつてもその面目は變らぬ譯には行かない。機械文明の歐羅巴であつても瑞典や諾威や丁抹等諸小國は活潑濶地の活力もない代りに、人情味の豊かな點においては天國にも比せらるべき國柄である。これらの諸小國にも社會黨は存し、労働總同盟なども存してゐるが、勞資双方はよく睦み合ひ和氣霽々たる芬圍氣であるのはつひ近頃の旅行記も記してゐる。

それからヒントを得ていふ譯でないが、現代大都市も固定性を高めて行くなら、人々互の利益の主張も経験から限度が定まつて行き、妥協の道に歩みよつてやがて安堵と親和と人間愛に歸着しないものではないであらう。現に手堅い老舗の者とか下町風に染んだ人達の間においてはえてそのやうな美點が発見されるのである。大阪の船場の商人の間においても、この種の氣風が濃厚であるのは、小説などからだけでなくとも、誰もが少しづつは経験するところであらう。

都會の性格中で生活改善といふ明るい面を伸ばしながら、同時にそれに缺けてゐる人間性をも培ひたいといふことになる、曾て社會學者の理想とした進歩と秩序の両面を實社會に實現しようといふ都會改造理念となるのである。その實現は決して容易なことではないのであるが、現代社會殊に大都市の問題としてかゝる企畫は早晚必要の時期が来ようと思ふ。今日、國によつては入國制限といふこともあるのであるし、國策的施設として海外移民會社のプランもあることであるから、大都市だけ肥大症に罹つてゐるといふ診斷だけでは濟まされない。健康帶を充てがふなり、安靜療法をとらせるなり、何んとか工夫が必要とならう。戸田貞三博士のいふところでは、假に東京帝大だけを他に移轉しても、五萬の資肉は、帝都の人口中から割取でき

るといふのである。是非共都會になければならないといふ必要のない官設諸機關を初めとして、専門學校大學などは、地方移駐によつて却つて生氣を吹き込むことができよう。若しこの手續を断行すれば、すべてが東京に集注してゐる我が國社會の腦充血的文化症なども、サラリと解決できないであらうか。都會を各地方に分散すれば、文化センターは多元化する道理であつて、對立、拮抗の勢もあらはれ、我が國文化の隆昌のため一石二鳥の効果まで狙ひうるころではあるまいかと思ふ。

近代社會のもつ暗黒面だけに注意を奪はれないで、社會學者タルドは嘗ていつたことがある。機械主義的生活ではあるが、昔のやうな精神性のない牛馬同然の生活ではなくなつて來てゐる。労働時間の合間々々にはインテンシブな藝術、娯樂の美しい生活面もあるではないかと。都市設計に關してタルドのこの言葉を實現性あるものとしたものである。

四 輿論の測定

アメリカにギャラップといふ輿論研究家があつて、今次歐洲大戰に對する米國民衆の意向や態度を時々調査しては公表してゐるが、これは社會調査の一例として殊に事柄の實際的意義から、注意せられてゐるところであらう。一九三九年九月獨逸のポーランド進駐によつて大戰の幕が切つて落されるや、ギャラップは早速これに對する輿論の調査に取りかゝつたが、その十月なされた結果からすると、「合衆國は參戰すべきであるか？」との問に對し四六パーセントがイエスと答へただけであつた。また參戰の輿論は獨逸のポーランド制覇の行はれて戰鬪が一時休止状態に入つた一九四〇年二月、三二パーセントに低下したのであるが、北歐作戰のなされた直後即ちその五月初めに至つては、急激に上昇して五一パーセントに達した。續いて、獨逸が蘭白兩國の中立を犯して西部戰線に常套の電撃戰を展開するや、英佛聯合國側に立つて參戰しようといふ意見が八四パーセント、不定のもの一五パーセント、親獨傾向のもの一パーセントといふ數字を示したと傳へられてゐる。とにかく、ギャラップの輿論調査の試みによつて、

輿論といふ一見捉へどころのないものが科學的方法で研究せられるやうになつたのは、社會學上最も示唆に富むことであつて、もし氏の輿論調査の方法が正確なりとするならば、輿論そのものの社會的性質からして、われわれは今後立法、經濟、文化、その他凡ゆる分野に互つて政治や政策の方針決定上、科學的根據を持ちうるやうになるに相違ないのである。少しく誇張していへば、ひろく政治一般が科學化せられるとさへ考へられるであらうと思ふ。假に立場を換へていつても、もし諸外國の輿論についてそのやうな確實な認識を持つことができるならば、相手國の動きをいち早く觀測しうる道理であるから、國際關係の問題の處理上にも外交方針を誤らないといふ好結果を來すであらう。また、もし輿論が獨り民族、國家といふが如き大社會の事實たるばかりでなく、如何なる部分社會、特殊集團においても力ある存在と作用とを有することに目醒めるならば、社會政策や社會事業の如き「社會技術學」の對策と施設との方面においても、これは決して無關係の問題であるまいと思はれる。

既にボガードスは彼の著述「新社會調查」ニュー・ソシヤル・リサーチ中に、社會調査の課題と方法とを米國における諸人種間の關係の調査に引例して説明し、社會調査の主要課題が輿論調査に存することを述べてゐる。現實的社會過程が人々の行爲より成立ち、人々の行爲が集團状態において單獨行爲としてでなく、集團意識の影響の下に「集團活動」となる場合の多いことを考へ合はせれば、彼のつた見解は不當とい

よことはできないのである。

然らば、ギャラップは輿論の調査に關して如何なる方法を用ひてゐるのであらうか。氏はその經驗からして社會各階層——種々の年齢階級、男女の別、上下各階級、都會又は農村居住者、各種職業關係者等々——の代表的意見を米國全土に亙つて全面的に調査し、これを統計的に計算する方法をとつてゐる。これがため、全國各地に多數の調査員を配置し上記各層の人々を任意的に捉へ、豫じめ用意した諸項目の質問を發しイエスカノーかを問ひ訊させ、かうして各地から氏の手許に集つてくる調査票を集計して結論を出す。從來、總選舉の度毎に政黨各派の勝敗の豫報を發したときなど、このギャラップ調査は殆んど適中したといはれてゐる。して見れば、氏によつて輿論の調査は大いに科學化せられたと考へられるのである。それ故、先頃我が國において中等學校入學試験廢止の問題を繞つて、文部省の決定した新考査法の是非が朝野の問題となつた時、大阪毎日新聞が全國の通信網を動員してギャラップそのまゝの輿論調査を行ひ、結局僅かの差ではあつたが輿論は新考査法に反對するといふ結果を紙上に發表したこともども、無意義の企てでなかつたことを裏書する。とにかく、輿論が今日調査しうる事實となつたといふことは、これによつても明らかであるが、然しこの問題に關聯して二つの忘るべから

ざる點のあるのは、一層注意されてよいところである。それは、輿論の調査は抑々輿論が如何にして成立つかを明らかにしておかないならば、却つて誤つた結果に陥ることがあるといふことが一つ。今一つは調査の結果、輿論の何であるかを知つた上において、この輿論が正しくまた必ず賢明であると考へる誤解が伴ひ勝ちであるから、これを警戒する必要のあることである。かくて、輿論調査の企は至つて好ましいことではあるが、その方法を科學的に完全ならしめることと、それとは別に、正しい賢明な内容を持つ輿論を作るための準備を怠つてはならぬといふ重大責務が考へられてくる。最初の點は無論のこと、第二の點と雖も結局は輿論が如何にして生成せられるかに深い關係を有するのであるから、以下兩者を取りまゝとめて考察したいと思ふ。

輿論は通例、多數者の意見のやうにいはれてゐるが、それは次の前提を俟つて許される見方であるに過ぎない。すなはち、多數の人々のとるところの意見に對しては、残る少數者はこれと異なる意見をもつにしても、喜んで服し、又は喜んで服さぬまでも默認の態度に出でる。つまり、強いて反對態度を固執しないで多數者に聽従する。かういふありふれた場合において多數者の意見が輿論となつて行くのである。この場合にも、少し穿鑿すれば少數者は何故多數者に

聽從するとの理由が尋ねられるであらう。多数の人々の意見であると決ると少数者は敢へてそれに反對せず、むしろ大勢に従ふやうになるのは人間性の常であるとし、社會心理學者トロッターは「集團本能」の原理をこゝにあげてゐる。これは所謂長い者には捲かれる、衆寡敵せずといふ心理的屈服傾向をいふものであるが、實にこれあることによつて多数者のとる意見を少数者も亦支持し、社會上輿論と稱するものが結果されるのである。

正確なことをいへば、われわれはこの場合トロッター説を以てなほ不満足な説明と考へてゐる。それを簡單にいへば、この場合の多数者と少数者との關係は、もしこれら兩者の間にゲマインシャフト的親和關係がなければ、期待せられるやうな結果をあらはさない。それがない場合においては例へば、少数者は飽くまで反抗態度を繼續することが可能であり、輿論は遂に現はれず、その代り内訌内亂の勃發にまで至りうるのである。これを思ふならば、普通の場合の多数者少数者關係を利用した政治上の多数決制は、國民各自の間に民族的ゲマインシャフト即ち感情融和の關係が存在しないならば、所期の効果を收めう可きでない。これらの點の詳説はいま省く。詳しくは拙著、文化社會學原理（第六版、昭和十七年）第一部、第二篇中、輿論の生成をふくむ文化形象一般の生成手續の分析を研究せられんことを望むものである。

従つて輿論を以て多数者の意見と見るのはその成立手續からいふ話であつて、輿論が一度成立した時にはそれが社會全體の支持する決定的意見であるのは争ひ難いのである。この事實を

裏からいへば、如何に多数者の意見であつても、少数者の側が未だそれに聽從、支持を與へないものであるなら、輿論でないといふ結果になる。輿論に關する理論家ローウェルその他の者が、反對的立場にある少数分子の黙認といふ事實がなければ、如何に多数の意見でも輿論でないといふと稱してゐるのは、よくこの點を捉へたと批評しうるのである。

屢々、輿論を社會全體の人々の意見であるとする簡單極まる解釋がなされてゐるが、その誤りなるは以上に述べたところから明らかとならう。すなはち、先づ多数の人々が或る一定の意見を探り、この意見に對して少数の人々も亦賛成乃至黙認を與へ、それに聽從するといふだけであつて、少数者は最初から意見そのものを等しくしてゐる譯ではない。内心異なる主張を持つてゐるのであるが、大勢に順應する態度を示してゐるだけなのである。然るに、同様のことは初めの多数者が一定の意見を探るやうになる經過についてもいへるのであつて、もともと人はその面の異なるが如く種々異つた考を持つことが事實であつて、彼らの間に意見の提唱者が現はれ、それに對し他の考から意見を戦はず者も出で、所謂意見の交換や討議の行はれる結果、やがてこれら一團の人々の間に一定した公論——それはさきに掲げた輿論の一步手前の多数者の

意見であるが——が採用、支持されて来る。これに對し少數者も亦聽從贊同する手續を以て、輿論が始めて確定せられ得るのである。それであるから、輿論が社會を構成する全成員の自然の共通意見でないことは極めて明瞭といはねばならぬ。彼らの間に、意見の提出、交換、討議、批判、聽從等、複雑な相互作用の行はれる總決算として、輿論が決定的意見といふ形で浮び上ると見なければならぬ。嘗て、ルソーが輿論を萬人の意志 (*volonté de tous*) でなく總意 (*volonté générale*) 即ち社會の意志として解釋したことなども、この關係に目醒めてゐた例であらう。

要するに、當該社會の輿論生成機構に對する科學的分析が先づなされて、輿論調査は初めて軌道に乗つて來るのである。

以上、輿論の生成について大體説明したのであるが、それを要約すれば輿論は社會人の意見の提出、交換、討議、批判、聽從等の手續を経ることから、萬人の學つて採用支指贊同する社會の意志といふことであるから、その内容を正しくまた賢明ならしめんがためには、何より必要なことは、合理的意見の提出と適當な交換作用が前提されねばならないことである。そして

次に、公正な討議と嚴正な批判とが行はれることを要する。また、他人の意見に聽くべき時には進んで聽くやうな雅量が存在が必要である。然るにこれに反して、初めから提出される意見が缺陷に満ちてゐたり、交換が障礙されたり、或は討議、批判の過程が不充分であつたり、その聽從が盲從に流れたり、或は聽從すべき場合にも頑固にそれを遊るといふことがあれば、輿論の内容は必然的に粗雑化せざるをえないであらう。このことは、輿論生成の手續を顧みる時、容易に知りうる輿論墮落の諸原因である。そこで、われわれの警戒すべきはこれらの諸原因の除去にあらねばならないのであるが、これを少しも考へず、輿論でさへあれば正しいもの、間違なきものとする誤解がまた古くから存在したのである。例へば「民の聲は神の聲」(*Vox populi, vox dei*) と稱する西洋の諺などがそれであつた。然し健全な生成諸條件を缺けば輿論とても正しくも賢明でもなくなることは、歴史と現實とがわれわれに立證するところである。眼前の事實に例をとると、今回の歐洲大戰に際して幾多の國家は輿論の見込違ひから、不幸な運命に追ひやられてゐる如き、その何よりの證據でないであらうか。これを思ふならば、輿論は神の聲であるなどと思ふことなく、輿論の健全化方策に萬遺漏なきを期さねばならないのである。合理的意見の提出に秀でた國民、意見の交換に訓練せられた國民、必要な知識と經驗とを

苦へて討議と批判とにおいて誤たざる國民、而して一度特定意見の正當なことを感知した上は、行きがかりを棄てて潔くそれに聽従する襟度ある國民、凡そかくの如き大國民の存在を前提として社會の意志たる輿論も亦健全となることを考へれば、輿論に關する對策の如きも、國家百年の大計中最も樞要な部分を構成するは、多言を俟たないと思はれる。

かくて、社會學的に見れば輿論の内容が神の聲の如くすぐれることを疑問とせざるをえないのであるが、輿論が輿論として成立した曉、神の聲の如く有力なることだけは認めなければならぬであらう。蓋し、輿論の性質は社會の意志、換言すれば集團意識といふことに存し、集團意識は個々人それぞれの主觀的恣意性を壓倒し、恰も群集心理の如き支配性を特質とするからである。人はよく群集心理に例を求めて輿論の力ある優越性を説明するが、「群集心理」と呼ばれるものは部分的に群集状態の諸個人が周圍の刺戟によつて感情の昂奮を來し、また多數のうちに自己の埋没するといふ隱匿觀念等、個人心理の特殊要素を伴ふ現象であるが、これら個人心理的諸要素を括弧づけるとき残る主要内容が集團意識といふものであり、輿論も亦その一表現なのである。つまり、個々人を立ち超える集團性が自己を主張するといふ點が集團意識

たる所以であつて、輿論も亦同じ點から集團意識となつてゐるのが見られよう。

集團意識の特性は、集團そのものの自己主張であるといふことから、群集心理も輿論も次の二重の意味で個人意識と異なる事實である。先づ第一に、群集心理も輿論も個々人から支持、採用せられる社會意識であるが、社會意識たる點から、個々人の意識内容と異らざるをえず、それは社會を居所とするものだからである。それ故、個人意識はこれを社會的なものとして受容れ、その影響下に立つ結果となる。こゝに、群集心理や輿論の力ある優越性が基礎づけられる。然るに、第二に、これらのものは集團全體の問題に觸發される性質のものであつて、群集全體の侮辱に對する反響、同じくその光榮をめぐつての拮舞、或は社會全體の利害休戚に關する意志的態度であるから、居所が社會的であること以上に、内容そのものが確定的であることをあげねばならぬ。かくて、個々人の私憤である限り群集心理となりえず、團體的公憤である時始めて群集心理の現はれる如く、個々人一身の立場において意志せられる利害關係の打算は、假令それが社會通念となり、社會意識とはなることができても、輿論的集團意識には到りえない。例へば資本主義的精神が社會意識の一形態であることは事實であるも、これが決して輿論でありえないことは、この點から理解せられるであらう。

輿論が個人各個人の意志をいふものではなく社会的意志をいひ、その上、社会的意志たる眞の意味が社会全体の利害休戚に關するものであることは、所謂輿論調査の課題を益々限定せずには措かないであらう。すなはち、たとく廣く社会の意見態度であるから輿論として調査するのだといふ如きは、必要にして不可缺の對象事實に關する社会學的理解の淺さを曝露するのみのことである。結果の擧がらないのはいふまでもないところであつて、われわれは輿論調査の一例を以てしても、社会調査の理論的陶冶といふことに想到せざるをえない。すべて、事實をばなれた理論が無益である如く、理論を缺く調査は徒勞なのである。

五 宗教と社会

宗教現象は社会事實中最も著しい現象の一つである。歴史的に宗教はすべての社会諸現象の母胎をなしてゐる。政治といひ、法律といひ、道德といひ、それらは皆原始的には宗教の内に含まれ、宗教現象が分化すると共に、それから派生したものである。古代における祭政一致の事實は神を祀ること即ち政事であつたのに由る。宗教的禁令は法律的制裁を伴つてゐた。又すべての道德は神意に忠實なる行爲に外ならなかつたのである。これらの社会現象が宗教の中に包含せられたと等しく、經濟・教育・藝術等の諸現象も古くは宗教的性質を具備せぬ譯には行かなかつたのである。

原始社会における宗教が支配的社會現象であつた事實と共に、それが唯一の有力な社会統制手段であつたことを擧げなくてはならない。そしてデュルケムの宗教社会學の研究はよくこの事を明らかにしつゝあると見做されるのである。

原始社會である部族においては、内部の人々は多くは同一血族たる信念に基づいて結合されてゐる。そしてかゝる血族的部族の有する宗教として最も原始的なものはトーテム教である。即ち多數の原始的部族に於て同一の徽章、部族の名稱、祭祀等が部族の祖先と見做される守護的動物(即ちトーテム、それは植物或は無生物たる場合もある)に關して行はれてゐる。徽章、部族名、トーテム動物等は皆神聖な事物であるが、デュルケムはこれらすべての事物に共通な原理を尋ねた。すなはちこれらのものに先立つて存在し、これらのものが亡びた後にも殘存するところの力、そしてひと度それが現はれる時には到る處に宗教感情を鼓吹する隠れた非人格的な力が存在しなければならぬとして、彼はメラネシアに於いてこの力がマナと呼ばれてゐることから、トーテムは一面に於て外部的形態をとるが、實は他の一面に於て社會を原理とするものなることを發見するに至つた。

例へば部族の旗印はトーテムの神の表徴たると同時に社會の表徴なのである。この關係は結局神と社會との同一物たるを示すに外ならず、社會の神たるトーテム原理は實に社會以外の何ものでもないとした。まことに社會はその成員に對して、神が信徒に對する關係と同一關係にあるのである。神とは人がこれに頼り、人が一定の仕方で行爲することを義務づける存在なのである。

であるが、社會も亦同様に個人に對して恒久的依存感を抱かしめるものであり、又われわれを凡ゆる種類の束縛・不自由・犠牲にまで拘束する。神は又われわれが、われわれよりも力強いものとしてこれに偉大な精神的權威を附與して、尊敬するところのものであるが、社會も亦全く同一理由からして同様の尊敬をわれわれに命ずる威力を有するやうに見える。神は個人の力の源泉であるが、社會も亦個人の力を増加し、個人を個人以上のものとしてくれる。社會の個人に對するこの作用は常性的である。個人は同類から愛撫され、尊敬されることを欲しつゝある。個人は文明のすべての成果を社會から受けとる。個人は社會の成員であるといふ一事によつて、彼を支配し、維持するところの力に關する觀念、即ち宗教的力の觀念を持つに至るのである。

デュルケムによれば、濠洲のトーテム教は幾多高等な宗教形態の基礎的形態である。濠洲の原始的部族の宗教は精神の觀念或は靈魂、神等の信仰を持たないのであるが、しかもトーテム教はそれらをよくむ高度の信仰の前身でなければならぬ。祖先は肉體に宿る精神たると同時に、自然物から遊離する靈的存在物である。この神祕的祖先は又神の觀念とある程度上の差異を有するに過ぎない。かくしてトーテム教は複雑高等な宗教諸形態と連繫するところのものである。

あると云ふ。

進歩した民族的構造を持つ社會では祖先崇拜の宗教を有することが屢々であつて、これは社會組織の一つの有効な手段となつてゐる。

進歩した部族社會に於ては、社會全體が血縁者の團體であり、その内部が又幾つかの一層親密な團體から成立つのが普通である。すなはち部族全體が同一の祖先から生れ出たと信ずると同時に、同一祖先からの子孫が集つて氏族を形成し、諸氏族が集つて全體の部族を形成する。氏族は更に同一の仕方で家族に分たれ、諸家族集つて氏族を構成するのである。かくの如き社會組織に於ては家長が家族的祖先の直系中の尊貴の者たると齊しく、民族に於ても民族的祖先の直系家族中最も尊貴の血統の者が宗家となり、宗家の家長が氏の長者、又は氏の上となる。同様に全體の部族中部族の祖先に對する關係に於て直系且つ最も尊貴の血族が他の氏族に對して宗氏となり、その氏の上が部族の長たる地位を占めるのである。

このやうな社會組織に即して成立つものが祖先崇拜である。人々は恰もトーテム教に於ける如く祖先を崇拜し、祖先の保護を祈願することで社會組織に服し、またこれを維持しかくして

社會の存続と發展とを可能ならしめて行く。この祖先崇拜に於ては、家族成員を統率する家長が家族的祖先を祀る僧侶であり、氏族成員を統率する氏の上が氏族的司祭者であり、部族全體を支配する族長が全部族の始祖を祀る最高の宗教的職責を異するのであるが、それは同時にこの特權に附帶する社會的權威を取得し社會統制の主體となることである。かくて祭政一致現象が祖先崇拜の場合に於て最も明瞭に呈示されるであらう。

祖先崇拜は、一面に於て、トーテム教に見られる如く、宗教が社會統制手段であることを明瞭ならしめると共に、他面に於てそれは血族的部族構造によつて制約され、社會の規定を強く蒙りつゝあること上述の通りであるが、宗教生活はその對象を爲す神の觀念の發達においてもまた重要な社會的影響を受けてゐる。

原始宗教に於てはこの世界から切り離された神々とはなく、神々は單に神聖な事物に過ぎず頗る具體的のものであつた。氏族や部族のトーテムたる一定の動植物が直ちに祭祀の對象であり、これから別に神の觀念があつて、この物を神聖視するのではない。事物は神聖な性質を内在せしめ、それ自體神聖なるものである。然るに宗教的な力が次第にこれら神聖な事物から

遊離して考へられ、獨立するやうになる。かくて精靈又は神の觀念が形成せられるのであるが、神はこの段階に於てはなほ一定の個所に官居すると見做され、又特定事物に關係交渉をもつものと考へられる。希臘、羅馬等の多神教の神々がそれであつて、神の觀念は事物から引離されてはゐるが、それは未だ空間的な存在として想像せられてゐる。

多神教における神の觀念は、原始時代のそれと比較すれば餘程具體性を少くしてゐる。然るに神の觀念の抽象化は基督教の信仰に至つて確定的に行はれ、神の王國は既にこの世界ではない。神の觀念は遂に世界から完全に分離し、極度に純化せられるに至つたのである。

蓋し神の觀念も亦一の集團表象であつて、社會の制約を蒙るからである。原始的小規模の社會に於ては、成員が皆齊しく具體的なすべての事物を感覺し、人々の意識状態は類似の特性を有してゐる。又一面に於て人々は同様の仕方で事物に對するのであつて、彼らの意識は一樣に同一感情を抱くわけである。その結果に現はれる集團表象、従つて社會意識は勢ひ具體的確定のならざるをえないのである。然るに社會の規模が増大すると共に、成員に共通して意識される具體的事物は減少し、抽象的事物を共有するのみとなり、また他方種々の境遇の人々は一事物に對してさへも同様の感情を有し難く、かくて集合表象たる神の觀念も亦抽象的、不確定的

なものに推移して行くのである。

宗教の發生上の特質やその社會的制約や宗教現象の社會的決定等に關する事柄は以上述べた如くであるが、宗教に附隨して形成される社會、即ち宗教團體は宗教に關係する社會として、特殊の現象を呈出する。社會學者はこの現象を教團心理と呼んで古くから興味を以て研究したのである。

群集はその成員が異質的たることを特色となし、すべての職業、凡ゆる階級の者が偶然の機會に集ることから成立し、人々は暫くにして再び離散する傾向を有するものであるが、宗教團體は決してかゝる一時的集團でなく、特に一定した信仰をもつ點において等質的集團である。宗教團體が一定の精神上の共鳴及び利害關係を有する集團であることは、これを學會、藝術團體と共に文化團體に列せしめる所以となるが、そこでは眞理、美等の價值ではなく只管信仰を實踐的に追求する點に於て、大きな特色を發揮するものとなつてゐる。

教團現象は幾多の點で群集現象に比較さるべきである。群集は一時的集團であつて、その現象は時に極めて極端に馳せ、狂暴に流れるのであるが、群集が短時間の内に爲し遂げることが

教團は長時間に亘つて企てるのである。原始基督教團、宗教改革時代の新教徒の教團運動がその好例である。教團は群集の持たない時間的存続性を却つて特色となし、それ故に群集が推理せずに行ふところや衝動的に行ふものをば熟慮的、計畫的に實行することができる。

而も教團も亦社會大多數の信念に對して反抗し、少數を以て多數の支配を覆へさうとする點に於て、屢々暴力的反抗の氣分を濃厚にし、この點に於て革命的群集と傾向を齊しくするのである。例へば近代の社會主義者の集團は一種の宗教團體と見るべきであるが、彼らに於ける反抗的氣分は周知の事實であらう。然し教團は反抗的團體であるとしても、群集と著しく相異なる點は、革命的群集が術策を弄せず専ら暴力にのみ頼るのに反して、教團は常に術策を手段とし、止むをえざる場合始めて暴力に頼るといふところにある。教團は主として頭腦を以て作用し、腕力に訴ふる場合に於てさへ、これを指導するものは精神力なのである。

群集と教團との第三の相異も教團の精神性から來てゐる。兩者共に指導者に盲従するのであるが、教團の場合には指導者は群集に於けるが如き無名、無責任の指導者ではなく、宗教的に光榮ある目的を明瞭に意識し、自覺する人物であるから、教團がその戰術上過ちを犯すことは甚だ稀となつてゐる。

以上教團を群集に比較し、その特性をあげたのであるが、この内教團が反抗的であることは特に注意せらるべき最大の特色である。この點こそは、カスト階級や合法諸集團が著しく保守的傾向を帯びるに對して、教團をして特有の社會たらしめるのである。

さきにデュルケムの宗教社會學說をあげ、次いで宗教現象の社會的制約を説き、又宗教社會の特性を述べたのであるが、こゝに宗教が社會統制の最も有力な手段の一であることを認むべきである。宗教心理の基礎が超越的事物に對するわれわれの歸依に存するとしても、宗教は單なる個人現象として止まるものではない。社會學の見地からするとき、それは一種の社會現象として社會機能を果しつゝあるのである。尤も宗教の社會統制上の機能は他の統制手段が未だ宗教そのものから分化し獨立しない原始時代に最も著しいのであるが、現代の文明宗教と雖も一面に於て純然たる個人的精神的な機能を營むと共に、他の一面に於ては大なる社會統制の役割を演じつゝあることを忘るべきではない。

宗教的信仰生活が單に個人現象に止まらないのは、それが必然的に特殊の集團を必要とし、その集團活動によつて擴布され、社會意識の承認を求めるといふことから説明さるべきであ

る。信仰は個人自らの安心立命のためのみでなく、他の人々を糾合し、他人の助力によつて自己の信仰を固め、信念の實現を期する意味に於て、多分に社會的性質を有する。こゝに教團とその現象とが生み出され、宗教は一の社會運動となつて來るのである。

それ故にすべての宗教はそれが存立する社會諸條件によつて制約されざるをえない。われわれはこのことを祖先崇拜、神の觀念の發達等の事實について明らかにしたのである。かくして宗教は常に社會の支持を得なくてはならないといふことが理解される。畢竟社會人はその宗教生活に於て神を作り、之を自己よりも遙に高い處に置くことによつて自己を向上せしめ、社會生活を完成して行くのである。この意味でジムメルが「神の下にわれわれが在るのではなく、神がわれわれの上に据ゑられるのだ」といつたのは至言とするに足りよう。

六 社會的實踐

何時の時から我が國で社會思想の研究を社會科學と呼ぶことが習はしとなつた。殊更マルキシズムを同情的立場で研究することが社會科學と稱せられ、この方面においてマルキシズムの理論以外に、社會科學なるものはないとの見方が支配した。その結果としてこの意味の「社會科學」が科學としての社會學と混同されるといふ不幸な成行を招いた。このことはわれわれの著しく不満を感じるところのものである。如何となればかゝる意味の「社會科學」はその實、社會思想の理論、特にマルクスの社會主義理論に外ならないのであつて、社會主義が一種の社會思想である關係上、それは思想であることは許されても科學そのものと自ら別個のものとして考へなければならぬからである。然るに社會學はそれとは反對に、もともと純然たる科學たることを標榜し、かの社會主義その他の社會思想の如く一定した階級意識を前提とするものではないからである。

諸外國に於ては「社會科學」の名稱は決して社會思想或は社會主義理論の意味に用ゐられて

はゐない。歐羅巴各國で社會科學の文字は單數、或は複數に使用されるのであるが、單數で Social Science とする時、それは古くから社會學そのものを意味した。例へばローレンツ・フオン・シュタインの刺戟によつて十九世紀の中葉獨逸に興つた一團の社會學者（例へばリール、ギドマン、ディツェル、モール、アーレンス、グラールゼラは既に Gesellschaftswissenschaft といふ名稱をこの意味で使用してゐる。社會學の祖國たる佛蘭西に於て歴史は更に古いものがあつた。次に複數形即ち Social Sciences といふ場合には社會的諸科學を指す。仍てそれは社會學以外經濟學、政治學、法律學等々多數の社會性を持つ學問群を指標するのである。そしてリッカート、シュタムラー以來社會科學の方法論がこの意味で論ぜられてゐるのである。獨り我が國にあつては、社會思想殊にマルクスの社會主義を奉ずる社會運動者が學界一般の慣例を無視し社會思想或は社會主義理論に對して「社會科學」の名稱を興へた。彼らの動機は理解できないことではないであらう。社會運動者が自己の主張に科學の後援ある如く見せかけることは、一の巧妙な政治手段でなければならぬ。また清新な科學の名稱を利用することは好學青年學徒の興味を唆り、彼らを自己の陣營に吸収する最良策でもあつたであらう。かくて社會主義者の側に於て宣傳上、運動上獲るところが少くなかつた筈であるが、純粹な科學としての社會學

は却つてこれが爲一般から猜疑の眼を以て見られるといふ迷惑至極な地位に置かれた。これはわれわれの遺憾とするところである。

社會學は科學として、恰も自然科學がその對象とする自然現象を虚心坦懐に科學態度を以て考究する如く、その課題とする人間社會事實を觀察し、その理論と法則とを求めやうとしてゐる。社會學が當初自然科學として、自然科學の方法を模して成立した歴史はよくその間の消息を傳へてゐる。デュルケムが社會學は社會現象を「事物として扱ふ」と宣言したのもその事實を説く以外のものでない。固より現代社會學は自然科學と社會科學との方法論上の差異を閉却するものでなく、社會現象の研究上、自然科學の方法をそのまま踏襲するものではないが、しかしその對象を冷かな科學の俎上に拉し來り分析し綜合することからそれを理解し、歸納し演繹することから理論、法則を構成樹立するのは、自然科學と何ら異るところはないのである。

人間社會生活そのものは極度に複雑であると共にまた多面的な現象である。社會現象が複雑なることから、人間心意の幼稚な時代にこれを宗教的に解釋することが行はれた。即ちすべてを神の攝理に基づいて説明することで満足したのである。また或る段階に於ては哲學的解釋が

企てられ、神秘的原理を想定することで社會生活の規律を導き出すことがなされた。形而上學の社會理論がそれである。今日に於ても知識程度の低い人々に對して宗教的説明は信頼を繋いで残存してゐる。また世間の大衆は社會法則の存在を意識しながらも、これを科學的に深く掘り下げる用意を缺き、形而上學的臆説に耳を傾けるといふ以上に出でてはゐないのである。

しかし社會にも法則性の支配することを充分に意識し且つこれを實證的に把握して行かうといふ貴重な科學精神と努力とは、自然現象の科學的克服に着々成果を齎してゐる現代文明の特質的一大精神運動といはねばならない。人間生活に最も密な關係をもつ經濟事實に對してアダム・スミス以來、そのことが先づ勇敢に實行せられた。その所産物たる經濟學は現に最も豊富な收穫をその内容に盛つて建設された。何人と雖も今日經濟學の無用を唱へる者はないであらう。また經濟學の存在を疑ふ者もないであらう。經濟學は社會生活に於ける經濟的部面を照明する科學として立派に成立したのであるが、もともと社會生活は複雑であるばかりでなく多方面な現象であるから、そこには經濟部面の外に政治・法律・宗教・藝術・思想等各種活動が認められる。人は經濟人たる以外アリストテレスのいつた如く政治人でもあり、カントの論ずる如く道徳人でもあり、その他法律人でもあり宗教人でもあり藝術家でもあり思想人でもある。

こゝにおいて社會の經濟活動を科學的に研究する必要があるの外、同じ意味で經濟以外の諸部面の事實を闡明する必要が起る。實際上その結果として多數の社會諸科學が樹立されてきてゐるのである。社會學も亦その一つとして數へらるべき科學であつて、人間關係、集團現象等を主要題目となし、これらの事實の説明と法則樹立とを企圖するやうになつた。オーギュスト・コント以來社會學は既に百年の歴史をもつのであつて、種々の學派や傾向の相異あるにも拘らず、よく各種の問題を顯現することに成功した。凡ゆる社會事實は人々間の關係現象でないものはなく、すべての文化は集團事實と目されべきものであるから、社會學が題目とする人間關係や集團現象等、所謂「社會事象」は最も中心的なる社會的事實であると謂ふべきである。従つて經濟生活を説明し、政治活動を解釋し、道徳行爲を批判し、或は宗教現象、思想運動等を理解するに當つても根本に於て社會學的觀察を行ふ必要に迫られ、社會學的認識を前提すべき理由が與へられる。社會學の輓近の發達が他の社會的諸科學を事實上社會學の統率下に持ち來す傾向の強いことから、この事實は明らかにされると信ずる。

諸外國に於ては夙に社會學を大學の重要な研究課程として列したのみならず、またこれを専門學校の教科目としても認め、最近に至つては尋常師範學校その他中等諸學校の必修學科に加

へつゝある程である。かうした海外教育界の傾向は、社會學の研究が學問上必要と認められるばかりでなく、その研究や知識が文明國民として修養上價值あることを證據立てるものでなければならぬ。我が國に於ても大學の文學部に於て一齊に社會學の專攻學者を養成し、法學部、經濟學部、商科大學等に於ても専門講義が設置せられた外、男子高等師範學校及び一部の高等商業學校、高等農林學校、師範學校專攻科等で社會學に關する講義が開かれてゐる。なほ文部當局は一時中學校、實業學校、高等女學校の學科目改正に當り、公民科の名稱の下に社會學的知識を中等學校の教授内容に導入する方針を採つたのであるが、われわれの希望としては速かに我が國専門諸學校一般に於いて社會學を必修學科として教授することが實現され、又それに止まらず、中等程度の教育機關においても獨立した社會學の教科が實施せられんことを祈るのである。蓋しすべての人間活動は必然的に社會的であつて、社會事象に關して正確な認識を持つことが社會人たる國民にとつて他の何物にも増して必要と信ずるからである。このことは生理人たる人間に對して生理學的知識が要求せられるのとなんら變るところを見ないであらう。

社會學がわれわれ人間の營む社會事象の科學として理解されるならば、社會學を以て現代社會に見られる社會問題を階級的立場から解釋し解決しようとする運動の一部であるとする如き誤解は、勿論一掃されるであらう。然しこのことを一層明らかならしめるためには、社會問題、社會運動、社會思想等の意義を明瞭ならしめることを要し、これに關して數言を費す必要に迫られるのである。

一般に社會問題なるものはこれを廣義に解するならば、われわれ現實の社會生活を如何に營むべきか、如何に改善すべきかといふ問題である。それは一種の倫理的課題であつて、恰も個人現實の行爲を如何に方針づけるべきかといふ道德問題と同様に、社會倫理的意味の問題である。事實上かゝる問題は古代より現代に至るまで何時の時代にも存在した人間生活上の課題である。恐らくそれは過去現在のみならず遠い將來の時代に互つて絶えることのない人類の運命的課題ともいへるであらう。しかし現在社會問題の名の下に意味されるものは、そのやうな一般性を持つ人生問題でもなければ、その特殊問題のすべてでもない。現代において社會問題と呼ばれるのは、十八世紀後半以後の近代社會に擡頭し來つた幾多の切實な諸問題を意味してゐる。即ちかの産業革命以來、社會經濟生活の變化から招來された勞働問題とこれに深い關聯を

もつ生活問題、分配問題、階級問題、犯罪問題、人口問題等々がその内容なのである。これらは悉く現代社會を特質づける諸問題であるが、これを半面から考察すれば、社會問題とは近代社會生活の内に萌した病弊や、缺陷を問題としたものである。これら生活上の疾患と文化的病弊が社會の側から救済され又善處されねばならないのは當然であるが、この關聯において三つの各々異つた方向を採る解決運動の行はれつゝあることをこゝでは指摘したい。第一は社會公共團體の保護と救済といふことであり、團體的、制度的な解決方針である。第二は比較的良好な境遇にある人々の自發的救護によるもの、即ち私的個人の慈善施設による解決策であり、更に第三は救治が直接社會的疾患に關與し自ら苦惱してゐる人々に委される仕方、換言すれば問題の當事者自身の自動的自助といふことである。このうち第一は社會公共の對策を具體化したものであり、社會政策に實現されてゐる。故に「社會政策とは社會が社會の爲めに社會の力によりて行ふところの政策である」(福田博士)といはなくてはならぬ。第二のものは私的慈善行爲であり、歴史的に社會事業の淵源をなした。第三の運動に至つては自ら社會的病弊に憫み或は改善を要する境遇に身を置く當事者の自力的奮闘に外ならないのであつて、それは社會運動と社會思想とに表現される。社會問題解決の方途についてゲオルク・アドラーは自助と國家的

救済と博愛とをあげたが、これは右に掲げた三つのものに符節を合せてゐる。

社會政策のうち主要のものは、人の知る如く、國家の立法的手段に頼つて最大の缺陷と認められてゐる労働階級の生活狀況の改善を企圖するものである。「今日の現實としては政策といふ以上、それが國家の運営を中心とするものなるが故に、社會は國家を通じて、國家の機關を主として、國家の力を第一の實行者としてこの政策を行ふに外ならぬのである」といはれる。これに反して社會事業は私人の慈善博愛の行爲にその源を發したものである。時として社會政策は支配階級が被支配階級に對して施す一種の階級的施設、即ち假面を以て行はれる搾取手段であるかも知れない。しかしかくの如きは恐らく畸形のものであつて眞の社會政策は「公法的權力を具備する團體が全體の立場から、労働階級の利益のために、労働關係或はこれと密接に關聯する領域に干渉する施設の全體」(シユピンドラー)を意味しなくてはならぬ。それは趣旨において又對象に關して著しく一般的であつて、社會事業の如く局部的施設ではないといふことを發見するであらう。それに對して「社會事業は集約的な、立法的特徴によつて總括せられた施設の複合體を提示せず、また全階級を把握するものでもなく、常に個人を第一に問題とするものであり、個人が社會事業の運動の中心點に永く殘留するのである。」かくて積極的

な制度的改革は社會政策に認められる特色であるが、社會事業は概して眼前だけの救済に止まるであらう。且つ又前者が理論に基礎を求めるに對して、後者は理論よりも寧ろ實際處置といふ方面に長所を發揮するのである。

右の如く社會政策と社會事業とは各々特質を異にしてゐるのであるが、然し翻つて考へるならば、兩者は根本的個所において共通性を持たないではない。その共通性をあげれば、二つのものが共に社會的缺陷や病弊に直接關與する當事者自ら行ふ積極的な自己救済の運動でないといふ點である。假令社會政策は社會全體がその部分に對して行ふ救済施設であり、また社會事業は社會の或る部分の者が他の部分の者に對して博愛精神の發露からする救済處置であるとしても、これらは齊しく當該社會部分に對しては外的救済運動たるに止まるからである。然らばこれらのものと反對に、當事者自らの自發的、自己主張的運動が考へられないであらうか。われわれはかくの如き傾向こそ多くの社會運動に具體化されてゐるものと見做す。例へば現在最大の社會的缺陷と惡戰苦闘しつゝある労働階級についていふならば、彼らが他者からの救済を待望することを止め、外部からする生活状態の改善施設を受容するを潔よしとせず、進んで自主獨行的行動に出づるに至つた最も顯著な事實がかの労働運動に外ならないからである。労働

運動はその階級が自らを助け、自己を主張する行動様式である。労働運動以外のものとしてもすべての社會運動はこれと同一の特質を具へてゐる。もし個人の場合において自助的行動が救済待望の態度よりも倫理的價值が多いとすれば、これと同様に一定の社會部分の自發的社會運動にも高い倫理的價值が是認せらるべきである。少くとも社會運動は社會事業、社會政策に劣らぬ社會的價值をもつものといふべきである。

社會運動を以て社會的缺陷や病弊に直接關係する社會分子の自助的行動であると見做したのであるが、このやうな特質を備へた社會運動の目標や傾向を常に直截に、或る場合においては極端に表現するものが社會思想である。社會思想は社會運動に附帶するユートピアである。仍て社會思想は社會革新思想であり、社會問題に關聯せしめていふならば、現代社會問題の解決に關する當事者自らの自主的思想である。そして現代社會運動中、その最も支配的なものは労働運動であらう。この點からするならば社會思想は労働運動の思想的寫影であつて、現にこれに對して指導原理たる役割を果しつゝあるかの如くである。共産思想、社會主義、マルキシズム等皆かくの如き特質を具備してゐる。かくして社會思想は、必然的に階級的立場に捉はれ、またかゝる局部的立場から宣傳教唆して善かれ惡じかれ社會運動を容認し、代辯し且つその指

導に任するのである。社会運動の意気込みの熾烈なる段階においては、社会思想も亦展々奇矯化せざるをえない。社会運動の規模を大ならしめ、進展を促進するがために過激化せざるをえない。しかしながら、極端なる社会思想と、これに附随する過激な社会運動とは、本来、その目的とする社会的弊害の救済解決以上に行き過ぎて、社会生活の一般秩序と基本組織とを却つて破壊することになり、全社会の革命的崩壊を醸成し易いのであるから、社会運動に対する節度ある取締と、社会思想に対する監視と必要な対策とは、常に要望される事柄に属するのである。

以上の説明を根拠としてわれわれの最後に述べたいことは次の諸点である。

現代といふ特定時代の缺陷解決の課題として社会問題があるのであるが、かゝる缺陷は一種の社会生活現象の現はれである以上、社会学が自己の主題とする方面に關してこれに觸れ研究を施すことは當然の事柄である。しかしながら社会問題とは限定された時代の社会事象の一種に止まるのであるから、社会学的問題のすべてではありえない。そこで社会思想の我が國における代名詞たる所謂「社会学」と本来の社会学との立場及び態度の相異は極めて明瞭であると信ずる。

しかし他の一方からいふならば、社会運動に対する取締りに關しても、又社会思想の批判に關しても、基礎的に要請せられるものは社会生活を支配する人間關係、集團現象等の理解であらう。例へば社会結合とは如何なる性質のものであるか、生活秩序と社会組織とは如何に成立つてゐるか、社会進化の特質とその條件はどうであるか、支配關係とは何を意味するか、階級とは何であるか、社会的闘争とは如何、輿論、群集心理、國家、國民性、道德、思想等の社会的意義如何等々。これら凡ゆる事項について明瞭なる知識を用意しえて始めて社会思想の矯激なる點を指摘し、また極端なる社会運動に對し批判を下し、確信ある態度を以てこれに臨むをうるであらう。曾てコントの力説した如く、現代は最早科学時代であつて、現代人は社会事象に關する正確な科学研究に立脚するのだから、到底満足に社会的諸事象を理解し、またこれを思慮深く調整しえぬこととなつてゐる。この點に關して社会学の知識が現代生活において最大の價値を承認せらるべきことは必然である。

われわれは社会思想と社会運動が科学としての社会学と異なる種類のものであることを充分意識すると共に、却つて社会思想及び社会運動の最良の批判と賢い對策に關して社会学的认识の極めて必要であることを痛感するものである、われわれは今主として社会思想と社会運動と

2344

後篇 理論と実践

二二六

に對する關係からこれを述べたが、社會政策、社會事業等についても亦同様の説を繰り返し、
こゝでも社會學の知識が適切な示唆を與へうるものであることを強調したい。これらのすべて
に關して、認識は豫見を助け、知識は實踐を導く筈だからである。

社會理論



定價 35 圓

日光書院版

會員番號 A114031

昭和17年12月15日印刷
昭和17年12月20日發行
昭和22年3月25日4刷發行

著者 松本潤一郎
發行者 坂田厚三
印刷者 東京都神田區一ツ橋二ノ三
印刷所 大島秀一
東京都下吉野寺七八七
太陽印刷工業株式會社
東京都下吉野寺七八七

發行所 會社 日光書院
東京都神田區一ツ橋二ノ三
電話 九段八三三七五六番
電話 九段二五四五番

29/3

日 光 書 院 刊

田邊壽利著

A 5判四二〇頁
價四〇円千三円

言語社會學敍說

社會學の立場から言語の社會的特質を解明し、研究者の要望に應えた我國唯一の書

松本潤一郎著

B 6判
豫定價四〇圓

社會學新講 『新版』

日本再建に中樞的な重要性をもつ社會學の全理論を最も平易かつ體系的に詳述す

361
MA81
7

